

TOSHIBA

Leading Innovation >>>

FUTURE DESIGN

vol. **52**

安全で快適なエレベーターの
未来をデザインする

2 0 1 7

特集 ● 交通と都市の未来形

「防災」と「応災」で

災害に 強い街に！



東芝エレベータ株式会社
TOSHIBA ELEVATOR AND BUILDING SYSTEMS CORPORATION

FUTURE DESIGN

安全で快適なエレベーターの
未来をデザインする

2017
vol. 52

CONTENTS

- 03 特集 ● 交通と都市の未来形
「防災」と「応災」で
災害に強い街に！
- 12 連載 ● お江戸の楽しい歩き方 第8回
神田駿河台周辺
- 14 連載 ● がんばる地方都市 第15回
福井県小浜市
- 16 連載 ● 異国の目から見たニッポン 第5回
オランダユトレヒト編
フランク・ラ・リヴィエールさん
- 18 連載 ● がんばる地方都市 第16回
長野県飯田市
- 20 連載 ● コラボで生まれ変わる伝統工芸 第3回
杉原商店 × ヨルグ・ゲスナー
今回の逸品 ● 和紙 「漆和紙」



● 今号の表紙
熊、本地震発生直後に車中
泊する被災者が数多く
いたことを憂慮し、慶應義
塾大学小林博人研究会が開
発した「ベニアハウス熊本」。
釘を1本も使わず、簡単に
組み立て／解体することが
できます。非常時には簡易
住まい、平時には移動式売
店やオフィスの会議スぺー
スなどとして多目的に使用
でき、不要になれば、解体
して保管が可能です。

表紙写真：©小林博人 イラスト：河本節明



アンケートにご協力ください

「FUTURE DESIGN」52号に
対するご感想をお寄せください。20ペー
ジでご紹介した(株)杉原商店の代表作
「漆和紙」シリーズから、茶色と緑色の
「B5ノートカバー」2冊セットを抽選
で10名様にお送りします。

越前和紙に漆を塗った「漆和紙」は、
和紙のしなやかさと漆の発色・強度を
併せ持つ、独特の風合いを持った工芸
品です。「漆和紙」を使って、本製品以
外に、筆箱、ペンケース、文書ホルダー、
カードホルダー、ランチョンマットな
ど、さまざまな商品が開発されており、
その高いデザイン性から2000年に
DESIGN WAVE FUKUI大
賞を受賞しました。手づくりのため、
仕上がりは一品一品異なります。

■応募方法
同封のはがきまたはFAX用紙、
E-mailでご意見をお送りください。
■締め切り
2018年2月28日到着分まで有効。



サイズ：190×270×高さ5mm

東芝エレベータ株式会社

2017年11月30日発行 発行 東芝エレベータ株式会社 広報室
〒212-8585 神奈川県川崎市幸区堀川町72番地34
電話 (044) 331-7001
URL <http://www.toshiba-elevator.co.jp>
E-mail elevator@po.toshiba.co.jp

制作 有限会社イー・クラフト
デザイン 手塚みゆき
印刷会社 株式会社メディア グラフィックス



地球環境に配慮した植物油インキを使用しています。

「防災」と「応災」で

災害に強い街に！

備えあれば憂いなし。日常の「防災」は重要だが、予想を超える災害に直面することもある。そんな時には、迅速に対応する「応災」も重要になる。今回の特集では、「防災」と「応災」の両面から災害に強い街にする秘訣を探る。



● 行政の取り組み



東京都 総務局 総合防災部 事業調整担当課長

宮崎 玄氏



東京都 都市整備局 都市基盤部 調整課 主事 (施設計画担当)

織田 智博氏



東京都 都市整備局 都市基盤部 施設計画担当課長

秋山 真氏



東京都 都市整備局 都市基盤部 調整課 主任 (施設計画担当)

青山 修一郎氏

● 生活のなかの防災



一般社団法人 防災ガール 代表理事

田中 美咲氏



● 発災直後



立教大学大学院 教授
長坂 俊成氏



立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究所 研究員
増田 和順氏



● 復興時



建築家 慶應義塾大学大学院 教授
小林 博人氏



行政と市民の連携で 災害に強い街づくり

1500万人の昼間人口を抱える東京都では、災害に対する平時の備えと、いざという時の対応をどうするのか。東京都総務局と都市整備局にお話を伺った。

災害対応力を高める 自助・共助・公助の連携

首都圏で広域災害が発生した場合、消防や自衛隊による救助、いわゆる「公助」が全域に広がるまでには時間がかかる。それまでは自分たちが命を守る「自助」が重要だ。

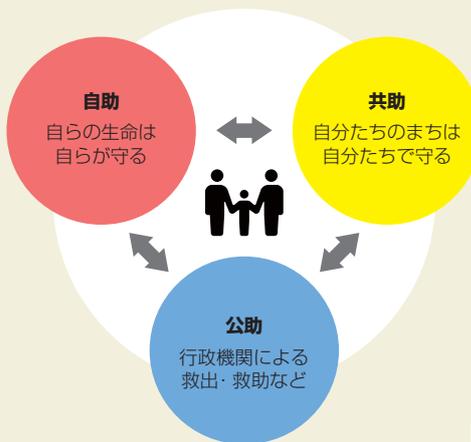
東京都総務局総合防災部の宮崎玄課長はさらに「近所の人同士で助け合う『共助』も重要です。災害時に配慮が必要な高齢者や障害者について、いざという時にすぐ支援できるネットワークを、平時から準備しておくことが大事です」と語る。

阪神淡路大震災では、8割以上の方が自助と共助で助かったというデータもある。自治会やマンション管理組合などを通じて地域の防災活動を知ることが、緊急時に自分の命を守ることもつながる。

防災訓練は総合防災訓練のような大規模なものから、町会や自治会が行う身近なものまで開催されている。災害伝言ダイヤルや消火器、消火栓などを体験できる訓練もあるので、いざという時に備えて使い方を学ぶ



携帯電話各社が行っている災害時の伝言サービス。平時に体験しておくことで災害時にも戸惑わずに利用できる。



被害を防ぐには行政と市民の連携が不可欠だ。

出典：東京都総務局総合防災部防災管理課発行「東京都防災ガイドブック」



東京都では、防災情報を網羅した防災ブック「東京防災」や各種リーフレットを作成している。いずれも無料でダウンロードできるので、都民以外もぜひ活用したい。

東京防災(ダウンロード先の電子書店一覽)
<http://www.bousai.metro.tokyo.jp/1002147/1002317/1002546.html>
リーフレット: <http://www.bousai.metro.tokyo.jp/bousai/1000031/index.html>



東京都都市整備局
都市基盤部
施設計画担当課長
あきやま まこと
秋山 真氏



東京都総務局総合防災部
事業調整担当課長
みやざき けん
宮崎 玄氏

COLUMN 1

早めの対応が必要な 地下街の浸水対策



東京都都市整備局
都市基盤部 調整課
主任(施設計画担当)
あおやま しゅんいちろう
青山 修一郎氏

都市部では地下街の浸水対策にも力を入れなければいけません。1993年8月には台風11号の豪雨によって、都内の地下鉄の駅がホーム直下の高さまで浸水、乗り入れをしていた路線が全線ストップしましたが、状況によってはもっと大きな被害が出る危険性もあります。

地下にいた場合は、水が入ってくる可能性が生じた段階で避難を始めていただきたいと考えています。地上に出るための階段やエスカレーター、坂道などは水が流れ込むルートになり、増水して濁流になると、それに逆らって上っていくのは簡単ではないためです。また、冠水時には漏電事故に備えて電気のブレーカーを落とすことも考えなければいけませんが、照明が消えたと地下街は真っ暗になります。自立発光する出口サインの採用や、コンセントを高い位置に付けるなどの対応も必要になります。連絡体制の構築も重要です。地下にいると地上の様子はわかりません。いざという時に行政が陣頭指揮を行うことは難しいので、管理される皆さんが主体となって道路や降雨状況の情報伝達訓練を行い、降雨時には早め早めの対応をしていただけたらと思います。



いざという時は、長めの板と土のうで止水板をつくると、家庭でも水の侵入を防ぐことができます。

ことも重要だ。

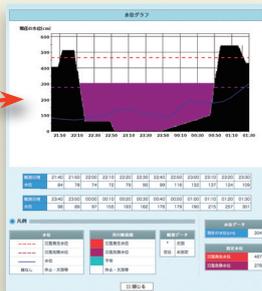
都市型水害への対策

東日本大震災以降、地震対策に注目が集まりがちだが、水害対策も重要だ。東京都都市整備局都市基盤部の秋山真課長は「東京では短時間で雨水が川や下水に集中します。環状七号線地下調節池の建設など対策を進めています。近年はゲリラ豪雨も増えているので、豪雨対策をさらに進める必要があります」と語る。

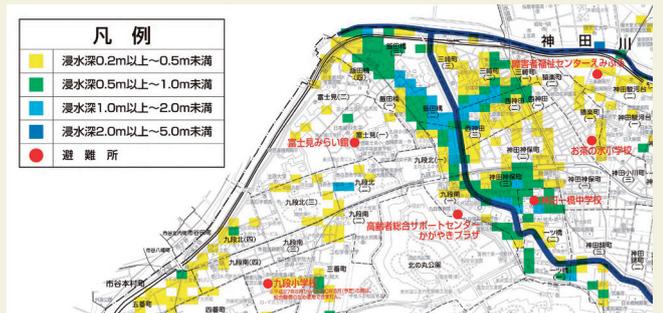
豪雨対策は主に浸水被害防止、床上浸水等防止、生命安全の3つに分けられる。浸水被害防止は大規模なものだけでなく、浸透ますや小規模貯留施設など、民間のビルや一般家庭で可能な対策もある。秋山課長は「浸透ますも有効なので、助成金制度などを活用してぜひ設置してください」と語る。

建物を建てる際、ハザードマップなどを参考にして水害に強い設計にすることも重要だ。敷地のかさ上げや1階部分をピロティにすることで床上浸水を予防できる。

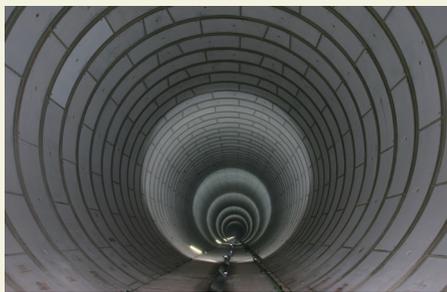
それでも防げない水害は、早めの避難で安全を確保しなければならぬ。あらかじめ近隣の高台や避難場所を調べ、豪雨が予想される時には河川水位情報や降雨情報をチェックし、身動きがとれなくなる前に避難を始めることが命を守ることにつながる。



東京都では都内河川の映像や水位情報をリアルタイムで提供している。三角形の水位観測所シンボルをクリックすると、河川の断面図と水位の変動グラフが表示される(画像は、東京都水防災総合情報システム [http://www.kasen-suibo.metro.tokyo.jp/])。



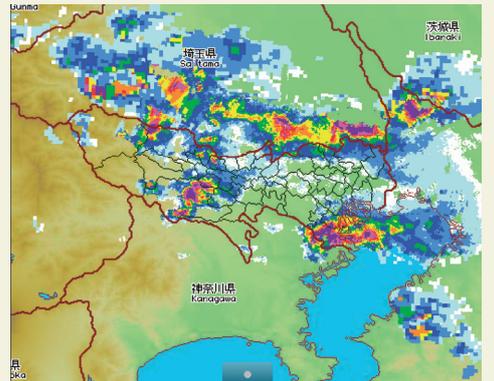
洪水ハザードマップの例。2000年の東海豪雨の雨量を想定し、浸水が予想される区域とその浸水深を示した。建物の新築時や防災計画の立案時に活用したい。提供: 千代田区



環状七号線の地下約50mに建設された地下調節池。神田川、善福寺川、妙正寺川の水約54万m³を貯留することができる。写真提供: 東京都



震度7までの地震を体験できる起震車。大地震を実感することで心構えができる。



東京都では5分ごとに詳細な降雨状況を示す「東京アメッシュ」を公開している(画像は2017年8月19日17時50分時点のもの)。http://tokyo-ame.jwa.or.jp

雨水を下水に流すのではなく地下に浸み込ませる浸透ます。一般家庭での設置に補助金を出している自治体も多い。写真提供: 東京都



COLUMN 2

地下のある建物を管理されている皆様へ



東京都都市整備局 都市基盤部調整課 主事(施設計画担当) 織田 智博氏

まず、管理する建物の危険度を知ることが重要です。東京都では、建設局等で2000年に発生した東海豪雨相当の雨量を想定した「浸水予想区域図」を公表しています。また、荒川等の国直轄河川においては、国土交通省が想定した「洪水浸水想定区域図」を作成しているため、こうした情報を活用していただければと思います。降雨時の情報収集には、東京都下水道局が配信している「東京アメッシュ」などを活用してください。浸水の発生に備え、土のうの常備やごみ袋・ポリタンク等を活用した簡易的な浸水防止対策も有効です。

都内12地区の地下街等では、各施設管理者の方々が非常に情報共有する仕組みを整えています。情報伝達訓練を通して、日頃から連携を図り、連絡体制を整え、各施設管理者が情報の発信者・受信者となって情報を共有する仕組みです。しかし、新しい地下施設は今後も増えていきますので、常に最新の連絡体制を整えておくことが重要と考えられています。



浸水に備え、土のうを常時しておくとうよい。いざという時はごみ袋やポリタンクも活用できる。

生活のなかに 取り入れる 「新しい防災」

ふだんの生活に防災を組み込むなど、「新しい防災」に取り込む防災ガール。彼女たちの活動から日頃防災とどう向き合おうかが見えてくる。



日常生活のなかに「防災」を

「これまで防災というと、耐震補強して防災グッズを備え、避難訓練を行うといった考え方が主流でした。しかし、自宅は寝るだけ、仕事はほとんど外回りで備蓄が役に立たない方もいます」と語るのは防災ガール代表理事の田中美咲さん。防災ガールでは従来の枠にとらわれず、「身につける防災」「ふだんの生活に組み込まれた防災」など、「新しい防災」の視点から活動を行っている。

きつかけは東日本大震災の復興支援での福島入り。現地状況と報道にズレを感じ、正しい情報を伝えることに興味を持った田中さんは、共感する仲間と連携しながら活動を始めた。

具体的にはWebページでの情報発信のほか、企業との連携によるデザイン性の高い「鉄板入り災害ボランティア用ブーツ」の開発や、サーファアの意見を取り入れた津波警告の新しい合図「オレンジフラッグ」の普及啓発活動も進めている。

「#beORANGEミサンガ」はまさに生活に密着した身につける防災アイテム。10種類以上の使い道がある新発想の多機能防災ギアだ。

防災に活かす暮らしの知恵

一方、滋賀県長浜市では、これからの時代に向けて防災を再定義するプロジェクト「生き抜く知恵の実験室 W E E L」を進めている。メンバー3名が、共同生活を送りながら、防災を「生き抜く力」であるとして、さまざまな生き抜く知恵についての試みや情報発信を実施。収納は重いものを下にする、2方向の避難路を確保する、野草の食べ方を教わるなど、日々の暮らしのなかに防災の知恵を取り入れている。



一般社団法人防災ガール
代表理事
たなかみさき
田中美咲氏

防災ガールが紹介した防災グッズの例

鉄板入り災害ボランティア用ブーツ



消防隊員が履く鉄板入り長靴がベース。厚底のためボランティアの人たちも安心して作業できる。

写真提供：防災ガール



ラウンドタオル

タオルケット、テーブルクロスなどふだんの使い勝手もよいラウンドタオル。裏側は津波警告サインにも使えるオレンジ色。

写真提供：防災ガール



オレンジフラッグ



サーフィンをしていると防災行政無線がほとんど聞こえないため、津波の警告として視認性の高いオレンジフラッグを提唱している。

写真提供：防災ガール



防災ガールのメンバー3名が暮らす長浜のシェアハウス。防災に活かせる暮らしの知恵を実践しながら情報発信している。

●近隣住民とのコミュニケーション促進アイデア



共助を意識して設置した縁台。日頃からご近所の人と密に交流している。右は防災ガールの筒木愛美さん。

日常備蓄による災害への備え

東京都 総務局
総合防災部

災害時、自宅に大きな被害はなくても、避難所に行くことになると考えていませんか。自宅が危険な場合は避難が必要ですが、避難所での生活はどうしてもストレスがたまります。自宅が無事なら避難所へ行く必要はなく、住み慣れた自宅で生活を継続することになります。

災害時のインフラ復旧は「電力7日、通信2週間、上下水道1ヵ月」と想定されています。また、道路の寸断により物流が止まると物資が入ってこないで、自宅で過ごすためには最低3日間の食料、できれば1週間の備蓄が必要です。

電池や生理用品、使い捨てコンタクトレンズ、簡易トイレなど、家族構成や持病などを考えて、きちんと選んでおく必要があります。可能な範囲で常備薬もあると安心です。カセットコンロも便利です。食料は温めると香りも出るので、食事の際の気分が違います。

重要なのは「備蓄品を買って終わり」にしないことです。食べ物は安売りの時に多めに買い、古いものから順に食べ、買い足していきます。被災時には毎日食べることになるのでふだんから食べて「美味しい」と思うものを備蓄してください。

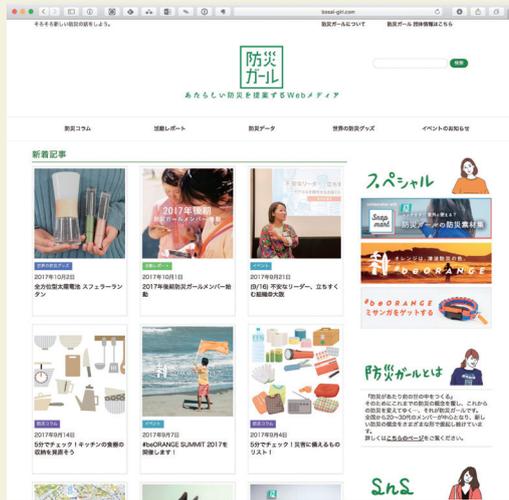
東日本大震災では歩いて帰宅する人で道路がパンクしました。そこで東京都では3日間は無闇に移動せず、安全な場所にとどまるようお願いしています。3日分の備蓄を備えた帰宅困難者の受入施設の確保を進めていますが、残念ながらまだ充分ではありません。外出先での被災に備え、栄養バーなどを持ち歩くのもよいと思います。



夫婦と乳幼児、高齢女性1人の4人家族の備蓄例
写真提供：東京都



出典：東京都総務局総合防災管理課発行「日常備蓄」で災害に備えよう



防災ガールのメンバーが自分の考えを発表するWebページ。偏った意見にならないよう、あくまでも中立の立場で情報を発信している。
<http://bosai-girl.com>



●リスク情報共有アイデア

●食器の飛散防止アイデア



日本古来の箱膳の考え方を取り入れた食器収納。地震で落下しても破片が飛び散らない。



生活するうえでの注意点を書き込んで情報共有。

強靱なパラシュートコードが使われていて、ロープワーク以外にもファイヤースターターなど多くの使い道がある。

イラスト提供：防災ガール



#beORANGE ミサンガ



オレンジフラッグ普及啓発活動「#beORANGE」のオフィシャルアイテム。

写真提供：防災ガール



デザイン性が高く、軽さは普通の長靴とほぼ同じ。ゴムは柔らかく、折り曲げることで簡単に持ち運べる。

写真提供：防災ガール

インターネットを用いて 防災情報を発信



クレバーメディアとは？

クレバーメディアは、平時はコミュニティのインターネットラジオ局として運用され、災害発生時にユーザーの危険度に合わせて適切な防災情報をプッシュ送信する。管理画面には、道路の冠水情報や救援要請などが地図上に表示される。

災害発生時に精度の高い情報発信を行うため、新しい緊急情報システムの開発が進められている。茨城県境町の実証実験を通して防災情報の将来像を見てみよう。



「気象情報」の出自：気象庁「日本周辺域天気図（2017年10月26日12時）」（<http://www.jma.go.jp/jp/g/3/>）を加工して作成

「河川水位情報」の出自：東京都水防災総合情報システム（2013年4月6日23時30分/目黒川）より。



増田 和順氏

1966年生まれ。つくば市役所職員、つくばコミュニケーション放送代表取締役、地域協働推進機構取締役などを経て2015年より現職。



長坂 俊成氏

1960年生まれ。筑波大学大学院経営政策科学研究科修士、トロンプロシエクト、慶應義塾大学大学院助教、防災科学技術研究所プロジェクトディレクターなどを経て、2013年より現職。

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 研究員
国立研究開発法人 防災科学技術研究所 研究員

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 社会学部メディア社会学科 教授



境町にある利根川の堤防(左側)。2階建て住宅の屋根よりも高い。

利根川に面した茨城県境町

茨城県境町は利根川と江戸川の間、岐点に面し、江戸から明治にかけては水運で栄えた。しかし、坂東太郎の異名を持つ利根川はこれまで何度も大水害を起こした暴れ川としても有名で、過去には境町も大きな被害を受けている。

現在は治水が進み、水害発生はほとんどなくなったが、堤防が高いほど、一度決壊すると一気に多量の水が流れ込む。災害時には、正確な情報収集と早めの避難が何より大切だ。そこで境町では避難訓練に合わせ、新たな緊急情報システムの実証実験を行った。

ネットとスマホで情報配信

行政からの情報伝達には、スピーカーで緊急放送を流す防災行政無線を採用している自治体が多い。しかし、豪雨のなかでスピーカーから流れてくる音を聞き取るのは難しいうえ、山間部など住宅密度の低い地域



想定浸水深3.9mのテープが貼られた電柱。住宅の2階が床上浸水する高さだ。



避難訓練当日の流れ

2017年10月1日、境町では、クレバーメディアを使って本番さながらの避難訓練を実施した。避難訓練当日の様をお伝えする。

7:30 災害対策本部会議を招集

洪水注意報の発令を受け、町役場職員や消防、自衛隊関係者が集合



8:00 被災状況を確認

管理画面で地図を表示し、各地域の危険度を検討する



8:15 町長による避難指示を発信

町長がタブレットから避難指示を発信



8:25 マップに表示された安否情報

マップに表示された安否情報。救援要請を受信した場合は、消防や自衛隊が救助に駆けつける



9:00 避難を完了した住民

小学校に避難した住民たち。地域ごとに集合することで、逃げ遅れた人がいないかをチェックできる

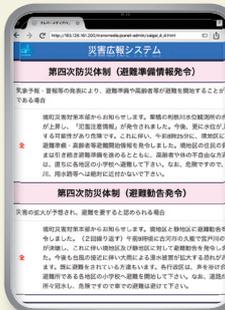


どんな画面が見られる？

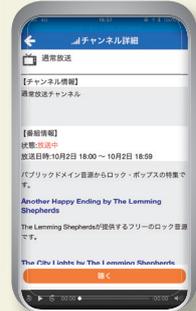
市町村は住民のアプリに「音声」と「文字」で防災情報をプッシュ配信する。住民は安否を役所に返信する。



情報発信は、インターネットに接続されたタブレットで操作できる。



放送内容を多言語で登録しておく、日本語以外の情報も自動的に送信される。



災害情報を受信すると、通常放送が緊急放送に切り替わる。



安否確認の詳細画面。救助を依頼すると、利用者情報や位置情報が管理者に送信される。

を完全にカバーするには大きなコストもかかる。こうした欠点をカバーする新たな情報システムが「クレバーメディア」。開発を行っているのは立教大学の長坂俊成教授と増田和順研究員だ。クレバーメディアはインターネットで配信される情報をスマートフォンで受け取るシステムだ。平時は音楽番組などが放送されているが、災害発生時には地域の危険度に合わせ、適切な情報が自動的に音声とテキストで送信される。Jアラートや緊急速報メール（エリアメール）との連動や外国語での情報発信にも対応し、ユーザー情報を登録すれば救助要請を送ることもできる。「東日本大震災の前からインターネットと同時放送を行うラジオ局を経営していて、当時から自動起動で情報を送るというアイデアがありました」（増田氏）システム開発が始まったのは2016年。「熊本地震で、益城町のコミュニティFM放送立ち上げを支援したのですが、被災者の方々が持っていたのはラジオではなくスマホでした。そこで、スマホに対して緊急情報を配信し、安否確認もできるシステムを、一からつくりうと考えました」（長坂氏）管理画面では被災状況やハザードマップ、救助要請を地図に重ねて表示することもできる。高度な災害対応が可能なクレバーメディアの本格運用開始に期待が高まっている。

平時

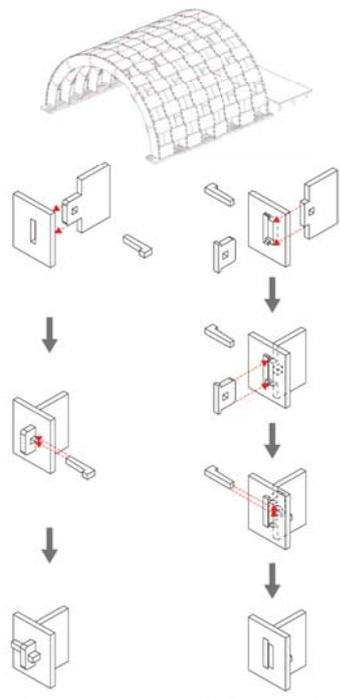
日常的に書架や会議スペースとして使っているベニアハウスも、災害時に解体して被災地に送ることができる。

©慶應義塾大学小林博人研究会



東日本大震災発生から5年目となる海開きを祝って計画された七ヶ浜(しちがはま)ベニア・ビーチハウス(宮城県)。海の家として地域復興を後押しするとともに、災害発生時には被災地に合板を貸し出すことができる。

©Kaz Yoneda



横ジョイント(縮尺 1/20)

横フラッシュジョイント

自分たちで建てられる ベニアハウスで 被災地を復興



近年、避難民のプライバシーを守り、生活環境を改善する取り組みが進められている。こうした取り組みは、被災地を早期復興する原動力にもなる。

建築家

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科 教授

小林・槇デザインワークショップ
代表

小林博人氏

1988年、京都大学大学院修士課程修了。日建設計、京都大学助手などを経て、2003年に小林・槇デザインワークショップ開設。2005年に慶應義塾大学准教授に着任し、2012年より現職。

皆で作業して コミュニティを再構築

「東日本大震災では、住宅という物理的空間に加え、地域コミュニティも破壊されました。津波で流された土地を元に戻せないなら、せめて昔のコミュニティを再構築させてあげたいですね。いろいろな事情を抱えた人が一緒に家をつくることで、物理的空間ができる」とともに人的ネットワークも復活します。これがベニアハウスを始めたきっかけの1つです」と語るのは慶應義塾大学の小林博人教授。ベニアハウスは、釘ではなく楔くわを使い、プラモデル感覚で合板を組み合わせてつくる建築だ。「自分たちでつくと愛着が湧きます。石巻の前網浜で漁師さんたちがつくった倉庫兼集会所はずみずみまできれいに掃除され、棚

も自作されています」(小林氏)

合板はCNCルーターというコンピュータ制御の切削機器で加工する。海外での復興支援では、あえて手加工の部分を多く残し、職業訓練につなげる試みも行われている。

避難所と仮設住宅をつなぐ 簡易住宅として活用

ベニアハウスは仮設住宅が建つまでの一時的な住居としても使用できる。熊本地震では、家に残された家財を守るため、テントや車のなかで寝泊まりし、エコノミークラス症候群を患われた方もいる。こうした悲劇は敷地内にベニアハウスを建てて寝泊まりすることで防ぐことができる。

広さ5㎡強の小さなベニアハウスであれば、組み立て時間は1時間ほど。水周りの設備はないが、

3人程度は楽に寝ることができる。2トン車1台に5〜6棟分の材料を載せられるため、被災地でも素早い展開が可能で、仮設住宅が建つまでのつなぎとしては十分な機能を持っている。

問題は平時のストック方法だ。水や食料を備蓄する行政も、さすがに住宅までは手が回らない。そこで考えられたのが災害時以外の使い道だ。

「どこかにストックがあればいいので、平時は別の目的で利用し、非常時に集めて被災地に貸し出すシステムがあればいいんです」(小林氏)

日常的に書架や会議スペースなどとして使い、普及させることで、災害時には販売倉庫に分散してストックされているものを救援物資として送る。新たな被災地支援の取り組みに期待が寄せられている。

被災地で役立つ 間仕切りシステムと木造仮設住宅

坂茂建築設計 / ボランティア・アーキテクト・ネットワーク

避難所用間仕切りシステムは2004年の中越地震から提供を開始しました。当初はなかなかうまくいきませんでしたが、2008年に藤沢市の防災訓練で紙管を柱・梁にして、布をかけて開閉できるものを提案し、これがシステムの基本形になりました。

紙管は短期間で製造でき、発災から4～5日後には設置できます。基本サイズは2m×2mで、碁盤の目状に無駄なく仕切ります。人数に合わせて何マス利用するかを決め、周囲にカーテン布をかけます。プライバシーが必要な時は閉じ、換気の際はカーテンを開けます。

熊本では間仕切りに加え、木造パネル構造の仮設住宅を1カ月の工期で建設しました。従来の仮設住宅は遮音や収納の問題を抱えていましたが、この住宅は壁に家具を全面配置することで収納スペースを確保しつつ遮音性能の向上を図っています。2棟の間に屋根をかけ、コミュニティスペースも配置しています。



岩手県立大槌(おおつち)高校に設置した間仕切りシステム。東日本大震災では50カ所の避難所に計1800ユニットが設置された。

©坂茂建築設計 / ボランティア・アーキテクト・ネットワーク(VAN)



熊本地震後の仮設住宅。もともと竹やぶだった場所に3棟10世帯を建設した。

©平井広行



●ネパール

建物の重量のあるコンクリート造の3階を取り除き、ベニアハウスを載せた。

●フィリピン

自然災害で大きな被害を受けたフィリピン・コゴン村では、ベニアを使って保育園を復興した。

©小林博人



復興時

1時間で組み立ても解体も可能な最小限ベニアハウス。移動が可能で、さまざまな用途に使うことができる。

©小林博人



前網浜ベニアハウスを製作中の地元の漁師さん。最初は「こんなつくり方、したことないよ」と言っていたが、やがて自分たちで楽しみながら器用に組み立てていった。

©藤尾孝悦



完成した前網浜ベニアハウス。自分たちでつくることと愛着が湧く。

©小林博人

海外の事例

お江戸の
楽しい
歩き方

第8回

神田駿河台周辺

江戸時代の学問の聖地

今回のテーマは「江戸の大学」。湯島聖堂からスタートし、その周辺を散策。湯島聖堂は、5代将軍・徳川綱吉が整備した孔子廟を中心に幕府直轄の学問所が置かれた場所です。広々とした境内に感動しますが、驚くのはまだ早い！ 師匠曰く「かつての面積は1万6000坪あまり。現在の東京医科歯科大学のキャンパスまでがその敷地だったんだ」とのこと。本郷通りを挟んで向かいにある神田明神には「江戸 国学発祥の地」碑があり、この辺一帯が当時の学問の中枢であったことがわかります。現在も大学が多いエリアなのは江戸時代の名残なんですね。ちなみに本郷通りは旧中山道の道筋に当たりますが、これは江戸時代に入ってから人工的につくられたものさそう。言われてみると、吾岐坂上交差点の辺りで不自然に東側にカーブしているのがわかります。かつての道筋はこの交差点を素直に南下する尾根道だったと師匠は推測しています。その根拠は、交差点近くに

案内役
お江戸



①湯島聖堂
日本建築史を創始した建築界の巨匠・伊東忠太先生設計の大成殿！ 厳かです。

大学には3つの流れがある。一番古い律令制の「大学寮」。明治2～4年まで存在した官立教育機関群である「大学校」。それ以降から現在までの「大学」さ。
(師匠・談)



②神田明神
聖堂の黒 & 神田明神の朱色、コントラストが素敵！



③本郷通り
なんの変哲もない道も、師匠の解説を聞くとまったく違って見えます。

なぜ本郷通りが曲がっているのか。その秘密は江戸城の外堀・神田川にある。もともとあった道は分断され、敵が直進して侵入するのを防ぐ道の形になったんだ。(師匠・談)

【門人】=文
タレント/歴史作家
堀口 茉純さん (愛称: ほーりー)
ほりぐち・ますみ ●1983年生まれ。
2008年に江戸文化歴史検定一級を最年少で取得し、「江戸に詳しくすぎるタレント=お江戸ル (お江戸のアイドル)」として知られる。主な著書に『TOKUGAWA 15』(草思社)、『UKIYOE 17』(中経出版) など。

【師匠】=監修

地図研究者
芳賀 啓さん
はが・ひらく ●1949年生まれ。東京の古地図や地誌の研究者で、東京経済大学客員教授。テレビ朝日『タモリ倶楽部』などのテレビ番組にも出演。主な著書に『江戸の産 東京の産』(講談社)、『古地図で読み解く 江戸東京地形の謎』(二見書房) など。



ある本郷給水所公苑の存在。給水所はそのエリアで一番高い場所につくられたことから、給水所周辺の道は、かつては尾根道だった可能性があるんですって。

人工の地形と自然の地形

お茶の水橋を渡った対岸が神田駿河台。駿河国で徳川家康が亡くなったあと、駿河詰めだった旗本たちが移住してきたことが地名の由来。つまり武家屋敷地だったんですね。

駿河台と言うくらいですから台地だったわけで、その名残を感じられる場所として師匠が教えてくれたのが明治大学の裏側の崖でした。言われてみれば確かにかなりの高低差があります。昭和になるまで、崖の上と下の行き来はできなかったんですって。

錦華坂を下って神田神保町の古本屋街に出ると「神保町一丁目町会」による解説板が。神保町の由来になった旗本・神保家の屋敷があった場所を確認して現地へ行ってみました。現在の有斐閣ビルとその隣のビルを合わせたぐらいの広さで、立派なお屋敷だったことがわかりました。

● 今回の締めの一旬

山茶花の散るやまぼろし尾根の道



若菅

崖下に積もる錦の落ち葉かな



堀口



⑦ 大久保彦左衛門屋敷跡

植え込みに石碑発見！「天下の御意見番」として名高い大久保彦左衛門の屋敷跡ですって。



江戸城埋め立て工事のために、神田山を切り崩したエリアの北限が大久保彦左衛門屋敷跡。その証拠に、この辺りから明大通りが下降しているんだ。(師匠・談)



④ 本郷給水所公苑

給水所公苑の土地だけ高くなってるなんて不思議～。



⑧ 夏目漱石「吾輩は猫である」石碑

夏目漱石が通った錦華小学校（現在のお茶の水小学校）にあります。



⑤ 神田川

この水路が江戸時代につくられたなんてスゴイ！



⑩ 神保家屋敷跡

当時の面影は残っていませんが、広がったんですね。



⑨ 「神保町一丁目町会」解説板

解説板を見て現地に行ってみるとリアル。



⑥ お茶の水<石碑>

将軍がお茶をたてる時、この辺りの水を献上したのが地名の由来。

がんばる 地方都市

vol.1

第15回

福井県小浜市

食育で、豊かな心を育み、 まちを元気に

福井県



小浜市にて
こんなところ



① 食のまちづくりの拠点「御食国若狭おばま食文化館」は2003年にオープン。キッチンスタジオ、ミュージアム、若狭の伝統工芸を体験できる工房などがある。隣接地には地元食材を味わえるレストランも。

② 給食開始時に、放送当番が今日の食材読み上げと生産者の顔には児童が描いた似顔絵看板も。

③ 小浜市では、「キッズ・キッチン」以外に「ジュニア・キッチン」も展開。キッズとジュニアは「キッズ☆サポーター」が企画・運営中。

「まちづくりで大切なのは、地域に昔から根づいているものを探し出し、それを磨きながら未来につなげることだと思います。」



今回のキーパーソン
小浜市役所 企画部 食のまちづくり課 主幹・政策専門員(食育) 中田典子さん



- 人口：約3万人
- 面積：233.09km²
- 概要：福井県南西部に位置する。日本海側唯一の大規模リアス海岸。若狭湾に面し、海の幸・山の幸・里の幸が豊富。
- 特徴：古代から海産物や塩などを朝廷に納めていた御食国(なかつくに)の1つ。食との関わりが深い伝統行事・祭りが600以上も継承されており、日本の食文化が集約されているとも言われる。神社仏閣の数も多い。
- 特産品：鯖のへしこ、なれずし、若狭小浜小鯛ささ漬、若狭塗箸など

食との向き合い方を模索

日本で一番幸せな県と称される福井県[※]。その南西部にある小浜市には、幸せを感じる「食のまちづくり」を展開している一人の女性がいます。地元出身の中田典子さんだ。県外の大学に勤務していた中田さんは、学生たちと過ごす暮らしのなかで、また、子育てを通じて、「食環境と人の育ち」について強い関心を持つようになったという。さらに、当時、イタリヤ生まれの「スローライフ」「スローフード」という言葉が聞かれるようになり、「伝統的な食文化を大切に暮らす方」に憧れを持つようになったそう。そんな折、故郷で始まった「食のまちづくり」、そして、食育専門職の全国公募を知った中田さんは、応募し受験をしたのである。それからというもの、彼女の生活は激変。4歳〜6歳児に料理体験を義務づける「キッズ・キッチン」では、「子供に包丁を持たせて大丈夫？」などの不安や反対の声に充分応えられるだけの準備に奔走。万全の準備で開催した結果、包丁を扱う子供の姿に保護者はもちろん、参加者全員が感動し、終了直後から次の開催日を問い合わせる電話が鳴り通しだった。

その後、ミラノ万博でも「キッズ・キッチン」を開催。会場内に鳴り響く拍手と歓声に、中田さんは涙が止まらなかつたという。また、地元の食材を市内小・中学校の給食に提供する「校区内型地産地消学校給食」の普及では、地元の食材を提供してくれる農家の方々と話し合いを行うことからスタート。現在では、生産者が学校に食材を届けると児童が「こんにちは」とあいさつするまでになった。児童は生産者に感謝の気持ちを持ち、生産者は児童の笑顔にやりがいを感じ、互いに生き生きとした交流を



4 食のまちづくり課では、地元の食材を積極的に取り扱う店を認出し、マップを作成している。古い街並みが残る三丁町にも認定店が!



5 活性化事業を展開している内外海地区。美しい棚田が広がり、小浜の豊かな自然を満喫できる。



8 伝統工芸「若狭塗箸」の研ぎ出しを体験できるのも魅力の1つ。ミラノ国際博覧会で開いたワークショップ也大盛況だったとか。

7 2016年に難度の高いマサバの養殖に成功した。サーモントラウトの養殖にも取り組み中。

6 自然体験施設「ブルーパーク阿納(あの)」は小浜の魅力の1つ。全国でも珍しい海上釣り堀があり、マダイを釣る、さばく、食べるという一連の体験が味わえる。教育旅行に人気。

FILE 15 OBAMA



藤谷浩介のここがポイント!

「食育」「食の地産地消」をうたう町は全国に数あれど、校区内産の食材だけで学校給食を賄う取り組みを実現できているのは小浜だけ。子どもたちが生産者との交流のなかから、命をいただくことの意味を体得しています。食の国・日本の、まさにど真ん中を行くのが小浜です!

またにこうすけ◎日本総合研究所 所長 研究員 日本全国の全町村を訪問し、地域特性を多面的に把握。整理・出演・寄稿等は年間1300件を超える。著書に「里山資本主義」「しなやかな日本列島のつくりかた」など。



TOBIO
小浜と京都を結ぶ街道群は、古代から豊富な海産物や塩などを京都へ運ぶ物流ルートだった。塩でしめた鯖が特に多く運ばれたため、近年、このルートは鯖街道と呼ばれている。鯖街道は2015年に日本遺産第1号に認定され、その起点となったいづみ町商店街には、鯖街道資料館と「京は遠でも十八里」と刻印されたプレートがある。

現在、小浜市では、若狭湾に面した内外海地区で、食を通じた産業の活性化に取り組んでいる。

例えば、小浜市のシンボリックな食材、マサバの養殖による「鯖復活プロジェクト」をはじめ、海の幸、山の幸に恵まれた風光明媚な魅力を世界に発信。漁家民宿を拠点にしたインバウンド誘致事業では、地元の暮らしに密着したイベントや長期滞在する欧米旅行客向けの郷土料理体験、自分で釣った魚を調理して食すなど、若狭湾の魅力を最大限に活かし、日本の食文化を感じてもらえる工夫も満載だ。

「この仕事を通して、食育が人のあり方、考え方、物の見方、心のあり方にもつながると確信しました。日本には『命をいただきます』、生かされている」という『いただきます』の言葉と精神があります。小浜市を訪れた外国人にも、この精神文化を体感していただき、その魅力を味わってほしいと思っています」と熱く語る彼女の思いは、国内のみならず世界にも発信され、浸透しつつある。

2018年4月からは、立命館大学で全国初の「食マネジメント学部」という、食を総合的に研究し、教育する学部が誕生し、小浜市と連携協力に関する協定を締結した。「開設後、学生さんが小浜市を頻繁に訪れ、フィールドワークするのが今から楽しみです」と中田さん。これまで彼女が築き上げてきた食育事業が学術的な視点から科学的に検証されるだけでなく、食育によるまちづくりをさらなる大きなステージへと導いているようだ。

※日本総合研究所「幸福度ランキング2016年版」による。

若狭湾の魅力の世界に発信!

育んでいる。

日本文化に
独自の要素を
プラス



Frank la Rivière

1961年オランダ・ユトレヒト生まれ。デルフト工科大学修士課程修了。レンゾ・ピアノが主宰する設計事務所等を経て、1991年、住友軽金属工業設計部に入社して来日。2007年、個人事務所フランク・ラ・リヴィエレ・アーキテクツを設立。「ねぶたの家 ワラッセ」で東北建築賞ほかを受賞。ICSカレッジオブアーツ、駒沢女子大学人文学部で教鞭も執る。

フランク・ラ・リヴィエレさん

●建築家・インテリアデザイナー

フランス旅行で芽生えた
建築への興味

フランク・ラ・リヴィエレさんは、オランダ・ユトレヒトに生まれた。ユトレヒトは「ミッフィー」の絵本で日本でも親しまれた、故ディック・ブルーナを生んだ街でもある。ラ・リヴィエレさんも小さい頃はこのブルーナの絵本で育った。父親は歯医者だったが、ラ・リヴィエレさんの興味はむしろ芸術のほうにあった。祖父が画家だったこともあり、アトリエに毎週のように通っては絵を描いて愉しんでいたという。

小学生の頃からバカンスやスキーなどでフランスを何度も訪れており、さまざまな建築物を見ているうち、建築家になりたいと思うようになった。高校の通学路には、今や世界遺産となっている、オランダの芸術グループ「デ・スタイル」のメンバー、ヘリット・リートフェルトが設計した「シュレダー邸」もあった。「当時はまだ施主のシュレダー夫人がご存命でしたので、室内までは見られませんでした。とても興味深い建物だったことが印象に残っています。現在は当時の状態のまま美術館として保存されていて、私も何度か訪れたことがあります」

デルフト工科大学工学部へと進み、建築とインテリアを学んで修士課程を首席で修了した。いくつかの会社を経て著名な建築家レンゾ・ピアノの設計事務所に入所し、リヨンの国際都市プロジェクトに携わったが、不況で計画は頓挫してしまう。そんな折、住友軽金属工業から誘いがあって、ラ・リヴィエレさんは日本へとやってきた。

お茶という日本文化に魅せられて

当時のラ・リヴィエレさんの役割は、EU（欧州連合）誕生を祝いでの建築ビジネスの橋渡し役だった。その後も「メゾンエルメス銀座本店」設計所長を任せられるなどの仕事を経験したのち、日本で個人事務所を構えた。

彼が手がけた作品の1つに「ねぶたの家ワ・ラッセ」がある。青森のねぶたを展示する博物館だ。なかが見え隠れする格子状の建物は、神秘的な日本昔話の雰囲気を感じ出すようにイメージされている。また、祭りが終わると本来、ねぶたは海に流されるため、展示場の床は夜の海が表現されているなど、随所に工夫が凝らされている。

そんな日本に精通するラ・リヴィエレさんが、以前から着目しているものにお茶の文化がある。自身も茶会に参加するなど、その世界を体感し、学んでいるという。

「お茶は総合文化です。お軸、お香、お華、それぞれが関係し、その一つひとつも奥が深い。しかも、その役割は細かく決まっているのです。私は茶室もお茶に欠かせない道具の1つと考えています。最近の合理性だけを追求した建物とは一線を画した、この小さな狭い空間には、無限の広さを感じられます」

彼が客員教授を務めるICSカレッジオブアーツでは、学生たちを交えて設計した茶室の建設が、現在進行している。外国人の眼で私たちが忘れていた伝統的な日本文化を吸収し、その上に「プラスアルファを加えたい」と語るラ・リヴィエレさん——そこから、はたしてどんな現代の茶室が生まれてくるのだろうか。



Utrecht / data



ユトレヒトの街並み

ユトレヒト

●面積：約99 km²

●地理：オランダ中部に位置するユトレヒト州の州都（オランダには12の州がある）。首都アムステルダムから東南30kmの距離にある。

●人口：33.42万人（2015年）で、国内第4位

●言語：オランダ語

●交通：オランダ鉄道の本社が置かれ、ユトレヒト中央駅はオランダで最も利用客が多い。各種の高速道路やアムステルダム・ライン運河が通り、オランダの交通の要衝となっている。



オランダと日本の都市はここが違う！

ユトレヒトも以前は、日本と同様に自動車が都市交通の主流を占めていました。駐車場も多く、お店の側(そば)まで車で行けるのが当たり前になっていました。それが、現在では環境に配慮し、主役は自転車に交代しています。自転車専用の道幅が広く取られるようになり、個人の車は自転車を優先させなくてはならず、そのうえスピードも制限されて、肩身の狭い思いをしています。

もちろん、自転車だけですべてが事足りるわけではありません。ユトレヒトでは、公共交通としてバスやトラム（路面電車）が多用されています。バスも大人数を運ぶ必要から、2台、3台と蛇腹で車両を連結した連節バスが多く見られるようになりました。



信号待ちの時も自転車が優先。

前に荷物を積める形の自転車も！

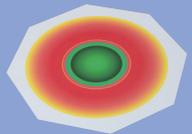
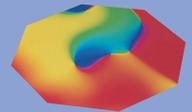


▲近年の主要作品の1つ「ねぶたの家 W・ラッセ」。東北建築賞、International Architecture Awards など、数多くの賞を受賞している。©Ogawa Shigeo



▲アムステルダム・アリーナ駅の構内。

初期の代表作「Y-House」。グッドデザイン賞（建築デザイン部門）などを受賞した。
©Shinchenkusha



▲外部からの依頼で、ラ・リウイエさんが毎年デザインを担当している年賀状。
©Tim Porter

がんばる 地方都市

vol.2

第16回

長野県飯田市

中心市街地活性化は 住む人のスタイルや 暮らし方を考えることが重要

長野県

飯田市

飯田市
「がんばる」

女性の視点、働きも重要！

中心市街地活性化の成功例として取り上げられる飯田市。この成功の陰には、この人ありと称される糸原和代さんがいる。

1985年から10年間、市役所の会計課でプログラミングの仕事をしてきた彼女に転機が訪れたのは95年のことだった。特別養護施設の事務に異動した彼女は、通勤途中にあった鬱蒼とした竹やぶを整備したいと知り合いに声をかけ「観耕隊」*というグループを発足して、活動を開始。その後は環境整備やスペースの活用、観光支援なども行い、2年後には協力者も当初の20名から倍増し、飯田市内だけでなく近隣の地域まで活動の幅を広げていた。

97年、この活動が導いたか、商工部商業観光課へ配属。のちのまちづくり推進室の発足要員となった。「私はお茶くみと伝票切りが半分、残りの半分だけ手伝うという半人前扱いでした」と語る彼女は、その悔しさをバネに市街地の再開発に向けた偉業を次々に成し遂げ、飯田市役所初の女性部長に就任した。

飯田市中心街地、再開発の特徴

飯田市中心街地の再開発には2つの特徴がある。1つは、75年に飯田インターが開通したこと、危機感を持った事業者の人たちが集合。87年から90年までの間「中心市街地活性化の計画づくり」をテーマに勉強会を続け、じっくりと話し合いを続けたこと。

もう1つは、中心市街地の再開発事業は建設部が行うのが普通とされていた時代に、商工部で行うことになったことだ。再開発後も市民が同じ市街地で働き、生活でき



食べるのが
楽しみ！

1 飯田市内の中心部にある、400m続くりんご並木。飯田東中学校の生徒が日々お世話をしている。

2 再開発事業を推進する民間組織として設立された飯田まちづくりカンパニー（通称「まちカン」）。



これからは、地域の特性を最大限に活かし、そこで暮らせるスタイルが、求められています。

株式会社飯田まちづくりカンパニー
プロジェクトマネージャー
くめはるかすよ
糸原 和代 さん

今回の
キーパーソン



●人口：約10万人

●面積：608.66km²

●概要：長野県の南端に位置し、13世紀に築城された飯田城を中心に、戦国時代から城下町として発展。明治以降は生糸などの地場産業で栄える。南信州の中心都市。●特徴：商店街が集中する中心市街地は、天竜川の河岸段丘上に位置するため「丘の上」と呼ばれている。人形劇の街としても知られており、1979年以来毎年夏に「いっぴろ人形劇フェスタ」が開催されている。●特産品：りんご、市田柿、五平餅、水引など





6



3



③「丘の上」と言われる中心市街地の再建に向け、2001年に完成したトップヒルズ本町。住宅を中心に、テナントや公共施設も入居する複合ビル。

④トップヒルズ本町1階のスーパー「キラヤ」。市民の食生活を支え、買い物のしやすさも考慮された広さになっている。

⑤まちカンが運営するトップヒルズ第二に入居するハンバーグ店。昨年のオープン時から人気スポットに。

⑥毎年11月に開催される「飯田 丘のまちフェスティバル」では市街地がまるごとお祭り広場に変身。「文化」をキーワードにしたイベントに、道を覆い尽くすほどの人が各地から集まる。

⑦飯田市川本喜八郎人形美術館。NHK人形劇「三国志」「平家物語」などで有名な川本喜八郎氏の製作した貴重な人形が数多く展示されている。これは必見!

トップヒルズ 本町

高松地区地域自治体協議会	生活保護課
全通 宇 市役所ロビー	



4



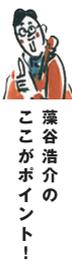
7



5

かつて空洞化を極めた飯田の中心市街地(丘の上)でも最近、行くたびに新しい変化と発見がある。とても素敵な場所に再生されてきました。語るに語り尽くせぬ志と実践の物語を紡いできた、糸原さんたち2代目キーパーソンが、頼もしい3代目たちを育てています!

もたにこうすけ◎日本学術研究所 所長
研究員。日本の全市町村を訪問し、地域特性を多面的に把握。管理・出演・寄稿等は年間1300件を超える。著書に「里山資本主義」「しなやかな日本列島のつくりかた」など。



藤谷浩介の
ここがポイント!



TOPIC
飯田市では、乗車定員10名の電気小型バス「フッチー」を中心市街地で運行している。最高時速は15kmで、誰でも無料で乗車でき、中心市街地を気軽にゆつたり回ることもできる。期間限定で、土・日・祝祭日のみの運行だが、「いいだ人形劇フェスタ」の期間中は、特別も運行される予定だ。

「山の上」と言われる中心市街地の再建に向け、2001年に完成したトップヒルズ本町。住宅を中心に、テナントや公共施設も入居する複合ビル。

トップヒルズ本町1階のスーパー「キラヤ」。市民の食生活を支え、買い物のしやすさも考慮された広さになっている。

まちカンが運営するトップヒルズ第二に入居するハンバーグ店。昨年のオープン時から人気スポットに。

毎年11月に開催される「飯田 丘のまちフェスティバル」では市街地がまるごとお祭り広場に変身。「文化」をキーワードにしたイベントに、道を覆い尽くすほどの人が各地から集まる。

飯田市川本喜八郎人形美術館。NHK人形劇「三国志」「平家物語」などで有名な川本喜八郎氏の製作した貴重な人形が数多く展示されている。これは必見!

かつて空洞化を極めた飯田の中心市街地(丘の上)でも最近、行くたびに新しい変化と発見がある。とても素敵な場所に再生されてきました。語るに語り尽くせぬ志と実践の物語を紡いできた、糸原さんたち2代目キーパーソンが、頼もしい3代目たちを育てています!

もたにこうすけ◎日本学術研究所 所長
研究員。日本の全市町村を訪問し、地域特性を多面的に把握。管理・出演・寄稿等は年間1300件を超える。著書に「里山資本主義」「しなやかな日本列島のつくりかた」など。

今後の飯田市街地の課題は「組織の世代交代をすることです。継ぐ人は失敗を恐れず、進んでいけばいい。私たちは継ぐ人を見守り育てていければいいと思っています」と暖かな表情を浮かべる糸原さん。

まちづくり事業を行っている地域の共通課題としては「それぞれの方向を向いている人をまとめてプロデュースし、1つの組織として動かしていく人が欠落していることです」とプロデューサーの重要性を語る。実際にプロデューサーとしても尽力してきた彼女は、強い危機感を持っている。

さらにその先を見ている糸原さんは「世界に日本を示すには、地域の街を個性あるものにするために頑張っている人たちの熱意を後押しする力として、行政が資金やネットワーク力などを提供し支援することが重要だと思っています」と言い、活動する側には「いすに座っていてもわからない。必ず現場に行つて見るのが重要です」と熱いメッセージをくれた。そして最後に「何より楽しくやること。これって重要よ」と微笑む彼女の顔は、眩しく輝いていた。

これからのまちづくりに重要なこと

この後の飯田市街地の課題は「組織の世代交代をすることです。継ぐ人は失敗を恐れず、進んでいけばいい。私たちは継ぐ人を見守り育てていければいいと思っています」と暖かな表情を浮かべる糸原さん。

まちづくり事業を行っている地域の共通課題としては「それぞれの方向を向いている人をまとめてプロデュースし、1つの組織として動かしていく人が欠落していることです」とプロデューサーの重要性を語る。実際にプロデューサーとしても尽力してきた彼女は、強い危機感を持っている。

さらにその先を見ている糸原さんは「世界に日本を示すには、地域の街を個性あるものにするために頑張っている人たちの熱意を後押しする力として、行政が資金やネットワーク力などを提供し支援することが重要だと思っています」と言い、活動する側には「いすに座っていてもわからない。必ず現場に行つて見るのが重要です」と熱いメッセージをくれた。そして最後に「何より楽しくやること。これって重要よ」と微笑む彼女の顔は、眩しく輝いていた。

ヨルグ・ゲスナー
Jörg Gessner

杉原商店

すぎはらしょうてん



代表取締役 杉原吉直さん

株式会社杉原商店

杉原吉直さんが10代目を務める、明治4（1871）年から続く越前和紙の紙問屋。紙問屋の枠を超えた事業を展開しており、「漆和紙」の製品化も、和紙と漆の組み合わせに可能性を感じた杉原さんが漆職人に声をかけたのがきっかけ。日本で唯一の紙の神様を祀る岡太（おかもと）神社・大瀧神社が地元であり、現在、2018年5月に催される「神と紙の祭り」1300年大祭の準備に奔走している。

www.washija.com



折り畳み式ペン／ブラシホルダー

今回の逸品

和紙

「漆和紙 うるわし」

福井県越前市



ヨルグ・ゲスナーさん

ドイツ生まれ。現在はパリを拠点にインテリア・テキスタイルデザイナーとして活躍中。2006年に初来日して以来、日本の伝統工芸に惚れ込み、それを活かした作品を数多く制作。2014年には、杉原商店と共同で制作したショーウィンドウディスプレイが、フランスの化粧品メーカー「ゲラン」の店舗を彩り、話題を集めた。

「今」

福井県の武生駅にいます。杉原さんに会いたいです」

2006年のある日、見ず知らずの外国人から、突然、電話がかかってきた。それが越前和紙に漆を塗った「漆和紙」を生み出した杉原吉直さんと、インテリア・テキスタイルデザイナーのヨルグ・ゲスナーさんの出会いだった。

「最初はビックリしましたが、話をしているうちに、ヨルグさんの和紙に対する知識の深さを知り、信頼できる人だと思いました」と杉原さん。それ以来、ヨルグさんは1年に1回は杉原さんを訪ねるようになり「この漆和紙で、面白いものができるんじゃない？」とデザイン性の高いランプシェードやコップ、筆箱やカード入れなど、さまざまな商品进行を考案。杉原さんはそれを商品化していった。

「意見を戦わせることもありましたが、多くはヨルグさんの意見を採用します。時代の半歩先を見ているような彼のデザインは、今の若者のニーズに合っていると思います」と杉原さんが言うように、ヨルグさんとのコラボで誕生した文房具シリーズ「JOYO」は、オリジナリティに溢れ、オシャレ感覚を刺激する作品ばかりだ。異業種・異文化との交流を積極的に行い、新しい和紙の可能性を追求する杉原さんだが、その一方で、「地元の人や若い人はもちろん、海外の人にも、和紙そのものの魅力も伝えていきたい」と、現在、敷地内にある蔵を和紙の展示室にしようとして考案中のこと。杉原さんもまた、時代の半歩先を見据えているようだ。

和紙に漆を重ねる技法。古くは、江戸時代に広まった「一閑張り」に見られる。茶道具などに使われた。軽くて強度がある一閑張りの小机を夏目漱石は愛用していた。その風合いのある高級な素材を現代の私たちは久しく忘れていた。その素材感を手軽に味わえる。かしわぎ・ひろし ●武蔵野美術大学名誉教授で、デザイン評論の分野の第一人者。各種展示の監修、デザイン関連コンペの審査員などを数多く歴任。

point

柏木 博氏
デザイン評論家